



TITLE:

邦文天文書總覽(一)

AUTHOR(S):

古川, 龍城

CITATION:

古川, 龍城. 邦文天文書總覽(一). 天界 1920, 1(1): 7-9

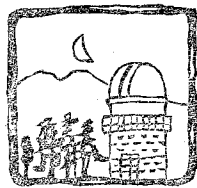
ISSUE DATE:

1920-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159514>

RIGHT:



邦文天文書總覽(一)

古川 龍城

是れから天文學を研究しようと思ふが何んな本が適當か。星圖は何が好いか。通俗書の趣味ある物を教へ給へと言つた様な質問に屢遭遇する事がある。其處で其等の天文熱心家に一々答辯する代りに今まで小生が耳目に觸れた限りの邦文の天文に關する圖書を書き並べ、且つ簡單な解説を附し、聊か會員諸子の御參考に供しようと思ふ。先づ適宜に分類して少年向きの本から始めよう。

著 譯 者

書 名

定 價

發 行 所

- | | | | |
|----------|---------|-----|-----|
| (一)澤田順次郎 | 天界の觀察 | 二八錢 | 博文館 |
| (二)秋山鐵太郎 | 通俗天文學講話 | 一六 | 開友社 |
| (三)民友社 | 天文の話 | 一〇 | 民友社 |
| (四)文部省 | 天文の學 | 一八 | 有隣堂 |
| (五)同 | 時學及時刻學 | 一五 | 同 |
| (六)河西環 | 天文讀本 | 三八 | 光風館 |
- 右の中(一)は例の「性」に關する著述を盛んにする。澤田氏の著す所で判り易く和歌など挿入してある。(二)は四號活字の小冊子で、此の程度の知識は高等

小學校の生徒にも解らうと思ふ。(三)は見ない。(四)は大分古い出版で比較的系統的に書かれ。(五)は知らない。(六)は矢張り大きい活字の本で、其の序文には古人は日月星辰を見て季節や時刻を知つたが、今の人は炬燵にあたりながら曆書や時計を見れば十分であるから、自然天界に縁が遠くなるこの意味を面白く書いてある。以上(一)から(六)までは最早や絶版である。最新の知識を含んだ少年天文書が出るのは甚だ急を要する事である。次は通俗的で餘り數學の式の入つて居ない物を並べる。

- | | | | |
|------------|--------|------|-------|
| (七)三澤力太郎 | 天界之現象 | 一二〇 | 光風館 |
| (八)横山又次郎 | 天文講話 | 二八〇 | 早稻田大學 |
| (九)同 | 天文地學講話 | 二八〇 | 同 |
| (一〇)本田親二 | 最新天文講話 | 四〇 | 文昌堂 |
| (一一)日本天文學會 | 天文通俗講話 | 一〇〇〇 | 日本圖書 |
| (一二)一戸直藏 | 天文學六講 | 五〇 | 大鏡閣 |
| (一三)新城新藏 | 天文大觀 | 二二〇 | 岩波書店 |
| (一四)原正二 | 天界の神秘 | 一〇〇 | 洛陽堂 |

以上九種の中(七)は兵庫縣伊丹中學校長三澤氏の著で口繪には日蝕の着色圖を入れ、明治三十六年初版發行以來今に命脈を保つて居るのは珍らしい。機械の挿圖は一寸多い。随分廣く行き涉つて居る事と

思ふ。(二)は明治三十五年以來矢張り今も猶行はれて居て、(三)と共に弘く地理學者に讀まれて居て、兩書とも書き振りが此の上も無く容易く、併し觀測法とか機械に就いては概ね省かれて居る。(一〇)は理學士文學士の本田氏の著作で書き振りが如何にも心地善く、全體を太陽系と恒星界とに別ち又最後に其等を總括して宇宙の進化問題にも觸れて居る。初めての人々には是非推奨したいと思ふが、早や既に絶版で古本屋にする片影を認めない。(一一)は諸博士の天文講演集で重に彗星に就いて書いてある。(一二)は矢張り講演を集めた物である。(二三)は新城博士の各新聞雜誌に掲載せられた論文を集めた物で決して難解の憂ひなく、宇宙と人生、宇宙の大法から重力、水、日月、流星など太陽系に涉り、七夕の話銀河の話、天體の廻轉運動、法華と天文等皆取り取りに面白く、最後に宇宙觀と人生觀とを配置し、吾人々類の歸趨を教へられた所、思はず讀過する。天文學者に非ざる哲學者、宗教家、社會運動に参加する人々も是非見通すべからざる好著と考へる。(一四)は天文事項の中面白く且つ容易な事を拾ひ集め

たものである。其れから或る特殊の事を書いた物を挙げよう。

(五)横山又次郎	地球と彗星との衝突	二五	金港堂
(六)一戸直藏	月	一〇〇	裳華房
(七)同	星趣味之天文	一八〇	大鐙閣
(八)小倉伸吉	潮の理	二〇〇	同
(九)同	日本近海の潮汐	九〇	日本郵船
(一〇)小野謙太郎	天象唱歌	一五	著者
(一一)高野弦月	ハレー大彗星の話	一〇	文明堂

右記の中(一五)は書名は如何にも一般人の興味を唆りさうであるが不幸にして未だ見ない。絶版である。(一六)は月に就き科學的に且つ詩的に記載したもので月の運から月世界の探險、月の地球に及ぼす影響、地球と月との歴史等、記述法通俗平易を極め、博士の月は天文と文學との連鎖であり、又月は天文觀測には妨害があるが天文學者も人間である以上其の月から色々の感想を催はし、其の美感に打たれる事を快く思ふとの意見は誠に人間味の豊かなものと敬服する。詩人文士の一讀を切望するが惜しい哉絶版である。(一七)は前書の姉妹書で後に趣味の天文と改題された。専ら恒星界に就いて記述されており、恒星の運動、スペクトル、等級、次に變光星、新星、星雲と星團、重星等一般的事項を掲げ次に各

星座を順々に巡回する。其の巡回旅行記が他の書に類は無く、趣味と價值ある物である。博士は變光星研究の大家であるだけに特に變光星の記事は親切丁寧を極めて居る。(一八)と(一九)は水路部技師の潮汐學に造詣の深い小倉氏の著作で其の眞値は論ずる迄も無く、兩書とも中學校で地理科を教へる先生方の一讀を希望する。(二〇)は小野船長が多年航海中天に輝く各星座の美麗と莊嚴に詩想を催はし凝つて一篇の長詩となつた物、曲譜も附加され一讀否な一吟の價值は十分ある。併し或は絶版かも知れない。(二一)はハリ彗星の出現の際新聞記者たる高野氏の編する所で、早や絶版。

所 感

伯爵 冷泉 爲 系

見れど猶わかぬみそらのことわりを

さとせる文のいさをたかしも

天文と旅行

岡山商業學校教諭 水野 千里

西曆一四九二年コロンブスが西航の途磁石が眞正の北を指さぬので夜分星の位置を觀測して船の方向を定めたことは有名な話で大洋を航海する人は星によつて方位を定め安全に目的の地に達するのである又埃及、支那の如き大平野のある地方は古より天文の學問が發達して居たことは普く知られて居るが吾々が旅行して未知の地に足を踏み込んで方角がわからなくなつておまけに夜分になると困ること一方ならぬのであるが少しでも天文の知識があつて一、二等星位の見分けがつくと方角を定めることは實に容易の事である尙惑星の位置を知つて居ると一層都合のよい事が多いのである又陸軍々人にも若干の天文的知識のあるときは夜分斥候などにいつてさんでもない方にとびこんだりおまけに敵陣に迷ひこむといふやうなことはないのである。